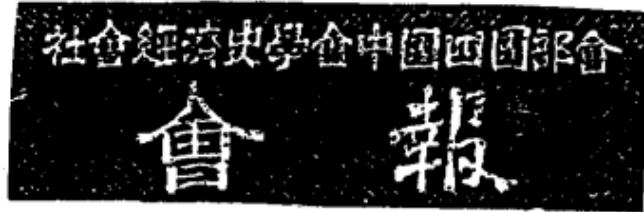

第 60 号

2021 年 6 月



編集発行
社会経済史学会
中国四国部会
事務局

社会経済史学会の理事の選出にあたって

張 曉紅 (香川大学)

社会経済史学会中国四国部会事務局長の張曉紅です。この度、社会経済史学会の理事に選出され、巻頭言を書かせていただくことになりました。最近になってようやく現実味が増してきましたが、本部から届いた理事着任の依頼書を拝見したときは目を疑いました。

どうして私に理事という大任の声がかかったのか、まったく理解できませんでした。その後、聞いたところによると、地方部会に所属していること、女性研究者であることが推薦された重要なポイントとなっていたようです。女性会員の視点を大切にしつつ、地方部会と本部の架け橋になってほしいという学会本部からの期待を感じました。

女性会員の視点の提供には私は貢献できるでしょうか。現在、日本は働く現場での男女差別を是正し、女性にとって活躍しやすい社会に向けて国を挙げて取り組んでいます。中国出身という影響があったのかもしれませんが、これまでさほど性別を意識して仕事をしてきていません。中国では共働きは常であって、だれも違和感をもっていません。でも、確かに、キャリアアップか、子育てか、常に女性に課せられる難しい選択です。とりわけ出産直後の女性にとって、仕事が面白くて、出産、育児にかかる時間を最小限にし、職場に一刻も早く復帰したかった人は多いでしょうが、そのようにできる人が現実にはどれほどいるでしょう。現状では、女性は家事や子育てなど家庭における負担が重く、家族の支えと協力がなければ、職場に復帰したとしても、さらなる活躍はハードルが高いでしょう。今年の3月に世界経済フォーラムが発表した「ジェンダーギャップ指数」によると、経済分野における日本の男女格差は、世界 156 カ国中に 117 位という驚きの結果でした。しかし一方で 25 歳から 54 歳までの女性労働参加率をみると日本 80%、米国 76%、OECD平均 74%、日本は決して低くありません。問題は労働への参加そのものではなく、むしろ女性は職場で思うように活躍すること、すなわち女性は職場で大きな責任を担うことは困難であるという実態が浮き彫りとなりました。

さて、私が社会経済史中国四国部会に入会したのが 2016 年 4 月に香川大学に採用された時です。香川に来る前に、研究・生活環境は福岡、大連、札幌、福岡と目まぐるしく変わりました。近代史に興味を持ち、中国と日本の工業化の道はいかなる相違点をもっていたのか、という疑問の答えを求めて、2000 年に九州大学に留学しました。その時から数えると早 20 年も経ちました。その間、2007 年 3 月に博士論文を提出し、2017 年 3 月に初めての拙著『近代中国東北地域の綿業』を刊行しました。現在、中国の瀋陽市と哈爾濱市の「満洲国」期の工業者の社会主義体制への移行、満洲に進出した日系紡績資本「在満紡」の経営活動について研究をしています。二人の子供に恵まれ、子育てしながら、日々の研究と教育活動をなんとかこなしています。子供はまだ小さく、たくさんのお世話がかかります。「ママ、ママ…」と呼ばれる度に、「えー？なに！」と反応し、満足に仕事ができないことに対する苛立ちもありました。

このような家庭の重い責任を背負いつつ頑張っている会員のために、私は何かできますでしょうか。地方部会の会員として、私はどのような役割を果たすべきでしょうか。真剣に考え模索しながら職務に励みたいと思います。

自己紹介・研究紹介

宇都宮千穂（高知県立大学）

はじめに

高知県立大学文化学部にも所属している宇都宮千穂です。日本の都市形成史の研究をしています。以前は、愛媛大学法文学部総合政策学科にも所属していました。どちらの大学でも、自身の研究分野を拡げながら地域づくりや地域政策に関する科目を担当してきました。

1. 経歴

2008 年に愛媛大学に就職する以前は、京都大学大学院経済学研究科で、地域開発を歴史的視点で研究しておられた岡田知弘先生のもとで学びました。学部時代は、ゼミナールで京都の地域経済をテーマにした調査研究に参加しました。合言葉は「書を持って街に出よう」で、フィールドワークが研究の中心にあるゼミでした。

一方で学部時代には、3 回生から渡邊尚先生のゼミにも所属しました。当時、受講していた科目の中で、興味ひかれた科目の一つが、渡邊先生の「経済政策」でした。講義は毎回、経済史をベースにした内容

で構成され、時に文化や哲学、思想にも及びました。友人のなかには、先生の語りを書き写し、全回分をまとめて冊子にした人もいたほどです。私も先生の講義に魅了され、そこで紹介された「古典」を読んだり議論したりすることに憧れました。そこで思い切って、3回生からは渡邊ゼミに所属を移し、M・ウェーバーの輪読に参加させていただきました。

その前後 1995 年 1 月、阪神・淡路大震災が勃発しました。これまで普通に暮らしていた場所、そして友人が失われたことに、衝撃を受けました。「自分は何をしたら良いのか」と自問自答していくなかで、岡田先生が震災調査を開始するという話を耳にしました。ゼミを移動したばかりの私でしたが、勇気を出して参加をさせていただけるかお伺いしたところ、岡田先生は快く許してくださいました。この震災調査で、関東大震災との政策比較を担当し、福田徳三の文献に挑戦しつつ、実際に仮設住宅でのインタビュー調査も行いました。震災調査は、都市形成過程を研究するうえでの原体験になっているように思います。

このように、3回生からは、幸運なことに渡邊先生と岡田先生の両方のゼミに参加させていただきました。今思えば、この時に歴史分析と地域分析の両方を学ぶ機会をいただき、その後の私の研究につながったように感じています。

2. 都市形成過程に関する研究

冒頭で述べたように私の研究は都市形成過程の分析ですが、都市に興味を持ったきっかけは、二つあります。一つは、上述の阪神淡路大震災で、都市がインフラストラクチャーによって維持されていたことを実感し、そのしくみがどのように作られたのかに興味を持ったからでした。もう一つは、大学3年生の秋に、天理市を観光で訪れ、独特の景観に驚いたことでした。天理市は、天理教教会本部がある都市です。近鉄天理駅から教会本部に向かって歩くと、天理教の寺院に似た建築物が集積しており、隣接する市役所もそれに調和した建物であることがわかります。私が知っていたいわゆる「門前町」とは、規模も雰囲気も全く違っていました。そこで、卒業論文で天理市を取り上げて調査したところ、興味深いことがわかってきました。天理教には、信者詰所（宿泊所）のほか、教育施設や図書館、総合病院があること、それらが天理教の教えにもとづき教会本部周辺に建設されている、ということでした。そして、入寄留人口の多さ、鉄道の敷設、市町村合併にも天理教とつながりがあり、財政面でも寄付金という形で影響を与えていることがわかりました。このような内実が、結果として目に見える景観に結びついていることが興味深く感じられ、大学院で都市研究を続けてみたいと思うようになりました。

院生時代は、修士論文と博士論文で、愛媛県新居浜市の形成過程を研究テーマに選びました。新居浜市は、住友財閥の企業城下町として知られ、現在でも、住友化学（株）・住友重機械工業（株）・住友金

属鉱山（株）が立地し、それらと関連する会社が多く存在しています。また、住友グループは山林を含む大地主でもあり、現在でも地域に影響を与えています。

今の新居浜市は、もともとは沿岸部の漁村であった新居浜町と、その周辺町村が合併を繰り返して成立した自治体ですが、最初に都市化が進んだのは1920～30年代でした。この背景には、住友資本の銅山業から重化学工業への事業展開と、それを支える港湾、道路、鉄道敷設といったインフラストラクチャーの住友による整備がありました。史料を読み込んでいくと、別子銅山のある別子山から港のある新居浜町へと、事業所と生活の場が下りていく過程が鮮明であると同時に、この移動を可能にした施設が住友によって独占的に建設されていくことがわかりました。それは県統計書等のデータからも明らかですが、視覚的にも明らかでした。この過程を通して、都市独自の景観が表れると同時に、企業と地域の独特の関係が築かれ、企業城下町が形成されたことが見えてきました。

しかし、都市形成過程では、生産関連の施設だけがつくられるわけではありません。住宅や病院、商店街、学校といった住民生活を支える施設も生み出されます。そこで私の研究では、D・ハーヴェイの分析視角を援用し、都市が企業の生産だけでなく、住民の労働力再生産の場でもあるという視点で分析を行いました。すると、生活関連施設の立地や創出過程については、住友の影響が強く表れる一方で、地元自治体の役割も求められていくことが浮き彫りとなりました。このような過程を通じて、企業城下町における労働力再生産の場、いわば生活空間の形成は、工場や事業所の立地とは同一ではない過程があることが明らかとなりました。

3. 労働力再生産と都市形成の研究

現在は、労働力再生産過程と空間形成の関係をさらに深めたいと考え、「都市的生活様式」に着目した研究も進めています。生活と都市形成を関連づけるものとして、最初に注目したのが「銭湯」でした。そのきっかけは、京都在住の頃に通っていた銭湯が廃業し、自分自身の生活に直に影響が及んだことでした。そこで、「銭湯」を通して地域を調査したところ、銭湯は、都市の衛生環境を保つ施設であると同時に、都市形成過程で重要となる労働力移動やコミュニティ形成、住宅開発とも関連する施設であることが明らかとなりました。都市形成過程の分析において、新居浜の研究がマクロな視点からの分析だとすれば、この「銭湯」の研究はミクロな視点からの分析、と私の研究では位置付けています。

そして今は、銭湯だけではなく「生活関連サービス業」に着目した研究を行っています。研究対象は、現在の勤務地である高知市内の旭町です。市内西部に位置する旭町は、戦前から戦後にかけて製紙業が集積し、当時は高知市内で1、2位を争う人口を有した地域でした。工場労働者が多く、その人たちが暮らすアパートや社宅、住居兼工場といった住宅も密集し、商業や生活関連サービス業も集積していま

した。しかし、1980年代からは工場移転と産業空洞化が広がり、今ではマンション開発と都市計画事業が急速に進められ、住民生活が大きく変わりつつあります。こうした旭町の歴史を、銭湯のほか、クリーニング店、理美容室などの生活関連サービス業を通して分析しているところです。現代史は史料が少なく、オーラルヒストリーに頼るところも少なくありませんが、抽象的な「生活」を具体的に明らかにしていきたいと思っています。

4. フィールドワーク教育と研究

ところで、初任の愛媛大学では、「地域コース」「観光まちづくりコース」という特別コースを担当しました。AO入試で選抜した学生を中心に、1年次からフィールドワークや演習に重点を置いた少人数教育が行われ、1学年20名を4～5名の教員で担当するという濃密な教育コースでした。

このコースでは、フィールドワークは月に1回以上、合宿は年4回以上のペースで行われ、私も県内山間部から島嶼部まで学生と共に足を運びました。コースには実務家教員が2名おり、地域とのパイプづくりにも積極的で、様々な地域連携事業も行われました。学部改組のためコースは消滅しましたが、終盤には国内外での大学間交流も盛んで、活動はローカルかつグローバルになっていました。こうした教育活動には賛否両論がありましたが、私自身は、学生を挟んで地域の実情とニーズを理解でき、また、歴史研究が地域にとってどのような意味を持つかを知ることにもなり、貴重な経験でした。

フィールドワークで訪れた高知県吾川郡いの町本川地区は、現在も調査研究を続けている地域です。本川地区は、地理的には高知と愛媛の県境、新居浜市の反対側にあたり、営林署とダム開発によって成り立っていた集落が多くあります。その経済構造に興味を持って調査をしていたところ、自治体史や新聞資料のなかに、これらの地域と住友との関係が記録されていることに改めて気づきました。四国の山間部は、戦前は薪炭、戦後は水力発電による住友関連事業へのエネルギー供給地だったのです。また、地域住民の証言からは、物流や人的交流などで愛媛県側との交流の歴史も長く、県境地域では愛媛と高知にまたがる経済圏や生活圏を形成していたことが見えてきました。都市からの視点では、山によって隔てられていると考えがちですが、そうではなかったのです。

地域の歴史を明らかにしていくことは、過去の記録だけでなく、その地域の住民にとって最良の地域政策とは何かを検討する材料になります。歴史研究の現代的意義を強く感じさせられました。

おわりに

以上のような研究をするなかで、職業研究者として資料保存の重要性を感じています。近年では、保存スペースの不足を理由に資料や文献の廃棄が気軽に行われていますが、適切な選別が行われているの

か、不安になることがあります。また、過疎化に伴う地域資料の喪失にも危機感を覚えます。地方で歴史研究に携わる者として、資料保存の重要性について研究を通して発信することはもちろん、地域の方々と協力していくことも必要と感じています。

最後になりますが、このような自己紹介の場をいただき、ありがとうございました。社会経済史学会には、大学院生時代から入会しておりましたが、就職後は教育と学内業務に追われ、昨年、ようやく高知大会に参加させていただくことができました。今回、中四国部会に入会させていただいたことを大変嬉しく感じ、研究への思いを新たにいたしました。今後とも、どうかよろしくお願い申し上げます。

【2021年度社会経済史学会中国四国部会・愛媛大会のご案内】

高橋基泰（愛媛大学）

2021年度の社会経済史学会中国四国部会大会を11月27日（土）・28日（日）の両日、愛媛大学法文学部で開催します。27日（土）午後は、自由論題報告（報告35分、質疑応答10分）を4本組む予定です。会員、大学院生の皆様の積極的なご応募をお待ちします。

28日（日）午前は、「村落社会の市場経済化と共同性の諸相：対比」と題して、シンポジウムを企画しています。本シンポジウムは、5月の社会経済史学会全国大会（神戸大学）で近世における上塩尻村（長野県上田市）の事例分析についてパネルを持った上塩尻村研究会のメンバー（長谷部弘・村山良之・山内太・岩間剛城）が、議論を深め総合研究モノグラフを公刊するまでの進展を開示し、国内外の対比をおこなうものです。対比として近世イギリスを高橋基泰が取りあげ、またドイツ近世史・環境史の専門家である村山聡氏にコメントをお願いしています。先祖から子孫へと家名、家産、家業、家格の存続をはかろうとする「家」が市場経済化とともにどのようにして登場してくるのか、その背景をなす社会経済的諸環境がどのように変化するのか。村落社会内部の人口動態の変容、市場活動の展開、歴史的制約性を持つ土地の市場化や固有の金融組織について検討します。ぜひご参加ください。

記

2021年度社会経済史学会中国四国部会・愛媛大会

・会場：愛媛大学法文学部（城北キャンパス 〒790-8577 松山市文京町3）

（最寄りのJR松山駅から、バスやタクシーを利用。市内電車を利用の場合、日赤前停留所）

・開催日程： 2021年11月27日（土） 13:00～ 自由論題報告

17:00～ 総会

17:30～ 懇親会（未定）

11月28日（日） 9:00～12:00 シンポジウム

なお、コロナ・ウィルス等の状況次第で、大会会場の利用ができず、オンラインのみでの開催となる可能性もあります。

【2021年度 社会経済史学会中国四国部会 島根大会 自由論題報告募集】

本年度の大会は、2021年11月27日（土）・28日（日）に、愛媛大学法文学部（松山市）において、開催されます。つきましては、大会1日目の自由論題報告を募集いたしますので、ふるって御応募下さい。身近な大学院生や留学生にも報告の機会を提供したいと思いますので、お声をかけていただけますと幸いです。報告を希望されます方は、下記事務局のメールアドレス宛にて、2021年9月6日（月）までに事務局（張）までご連絡ください。よろしくお願い申し上げます。

なお、ご報告される方には、報告要旨（A4サイズで2枚以下）を2021年10月下旬までに愛媛大会の大会事務局へ提出して頂きます。この詳細につきましては、追ってご報告者にご連絡いたします。

Covid-19（新型コロナウイルス）の流行により、昨年同様、対面式とオンラインの同時開催を検討しております。遠隔会議ツールを用いての開催案内は改めて差し上げます。また、部会ホームページにも情報を掲示致します。なお、状況次第で、大会会場の利用ができず、オンラインのみでの開催となる可能性もあります。以上、あらかじめ、お含みおき頂きたくお願い申し上げます。

【編集後記】

今号は、高知県立大学の宇都宮千穂先生の『會報』の編集について、不手際で、不備自己紹介・研究紹介をいただきました。ご寄稿、心より篤く御礼申し上げます。なところが多々あると思いますが、ご指摘やご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

社会経済史学会中国四国部会事務局

〒760-8521 香川県高松市幸町2番1号

香川大学経済学部 張 暁紅

e-mail : zhang.xiaohong@kagawa-u.ac.jp

部会 HP : http://dlpweb.ed.kagawa-u.ac.jp/main/?page_id=311